

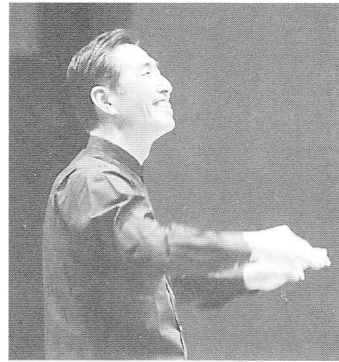
## 指揮者の目

## 合唱団イクトウス

## 指揮者 高橋

## 英男

## 折々に考えたこと



そんな時に、先生が「皆さんが、この曲をどうしてもお歌いになりたいのならば、一つだけあるとてもよい方法をお教えしましょう」と言われ、それに続けておっしゃった言葉です。

今、改めてこの言葉を考えてみると、これは「アマチュアが音楽を深めていく時のヒントになる言葉」ではないかと思うのです。

アマチュアは「プロのような、短時間であらゆるスタイルの音楽を形にし、表現していく力」はありません。

しかし、時にプロ以上の表現をし、聴衆に感動を与えるのは、「自分が歌いたいように歌えるようになるまで、練習を重ねた結果が、音楽としての魅力を生み出すから」だと思っております。

## ② 『秘密』はなかった!

ノルウェーの指揮者グレート・ペダーセンさんに関わることです。

ペダーセンさんと私の出会いは「オーバー!」は、京都で行われた「世界合唱シンポジウム」での「オスロ・カンマーコア」の演奏

でした。

その衝撃は、「合唱観が変わる」というレベルのものでした。

日本のコンクールの上位団体の演奏は（コンクールということでは）仕方ないのかもしれないが、「これでもか! どうだ上手いだろう!」

という感じのものが多く（ある方は「喧嘩合唱」と言ったとか）、私の感性には合わないものでした。

しかし「オスロ」の演奏は、音楽性が非常に高いのに、そのような感じは微塵もなく、きわめて自然なものでした。

後日、別会場で、ふとペダーセンさんを見つけた私は、思い切って話しかけました。

「あなた方の演奏に大変に感動しました。素晴らしい演奏の秘密は何ですか?」と、その時の彼女の答えは「そういうものは、ないのです」というものでした。

彼女は2年後、再来日し、神奈川県などで公開レッスンをを行いました。

私は参加できなかったのですが、VTRを見ることができました。彼女は、モデル合唱団に（ウの

発音をもっと深くさせる）（ポリフォニーで、各自の積極性を増すために、歩きながら歌わせる）（発語から響きまでの時間を短くし、そのタイミングを大事にさせる）などの指導をしていました。

言うなれば、その時合唱団に必要なことを普通に指導していたわけですね。

やはり「秘密」はなかったのです。そこで、私は次のように考えました。京都での彼女の答えの意味は、合唱団の状態を把握して、そこから良い音楽にするために必要なレッスン内容を考え、効果的な方法で指導しているだけだ、ということだ、と。

だから、指揮者には（事前に楽曲研究を十分行ってくるのは前提として）、常に変化する合唱団の状態を把握して、どう練習すれば歌い手が向上し、良い音楽になるかを考え、効果的な方法で実行することのできる力が求められるのでしょう。

私には、まだまだ遠い道程のようですが、少しでも近づけるよう努力していきたいと思っています。

合唱団イクトウスのウェブサイトに書き溜めたことの一部を披露（多少の校正あり）させていただきますと思います。

## ① それは、歌えるまで練習することです。

「唄う会」という団体で『原爆小景』『日ノ暮レチカク』を練習していた時の田中信昭先生の一言です。

この曲は譜面が非常に難解で、私も自分の限界を悟った曲でしたが、多くの団員が苦しんでいました。